

オーストラリア大陸横断の旅

Australia Transcontinental Journey

古里明瑠

Akaru Furusato

EICA 名誉会員

1. オーストラリア大陸

世界6番目の大陸がオーストラリア大陸で、全てがオーストラリア領である。オーストラリアの国土には、大陸部の他にタスマニア島など周辺諸島も含むが、今回は大陸横断の旅をご紹介します。

ご承知の通り、オーストラリアは、日本と経度的には同じ地帯で、南半球なので、気候的には正反対ながら、時差が少なく、距離的にも近いので、旅行に出かけるには、行きやすい外国である。

地層学的には、 Gondwana 超大陸から、アフリカ大陸、南極大陸、インド大陸が分離して移動した残りの部分だとされていて、最も古い大陸ともいわれている。

動、植物ともに特有のものが多く、我々に身近となったコアラ、カンガルーなど有袋類も多い。

ヨーロッパから遠い地であることから、17世紀初頭オランダ人の探検家がオーストラリア大陸を発見（?到達）するまで記録がない。以降曲折の後、英国の植民地となり、流刑地として入植がはじまり、20世紀初頭に事実上独立し、6州を主とした連邦国となり、形式上は英王室を君主とする立憲君主制で英連邦を形成するが、カナダ等と同様、英国とは形式上のつながりだけで、政治的には完全な独立国家である。

先住民のアボリジニ人は、先史時代（40,000～60,000年前）、海水位が低くアジア大陸と陸続きであったところに、陸地伝いに移住してきたアジア系であるとされるが、もともと人口が少なく、長年のヨーロッパ系移民の優遇政策のため、現在の国民の80%はヨーロッパ系白人、アボリジニ系2%、アジア系その他18%（総人口2,569万人）。国土面積769万km²（日本の約20倍）。南北3,700km、東西4,000km。大陸の中央部は、砂漠とステップ（乾燥地帯）で、国民の大半は沿海部に住んでいて、都市も東海岸に集中している。高度は、東海岸に沿って大分水嶺山脈があるが、最高峰でも2,228mで、中西部にも、高山はない。

鉱石類、農畜産品の世界有数の産出国で、わが国との繋がりも深い。中学社会科的紹介はこの辺で。

2. シドニー

2010年1月27日真冬の東京成田を夜出発し、約10

時間で真夏のシドニーに朝到着、時差が1時間なので楽である。シドニーは、オーストラリア第1の大都会（人口491万人）第2の都市メルボルン（489万人）と首都誘致で争った結果、両市の中間のキャンベラ（46万人）を、首都とすることになったという。シドニーは、高層ビルの立ち並ぶ近代的な街で、緯度的には南緯34度で、東京と大差がなく、温帯で寒暖差が少なく過ごし易いという。気候は東京とは真逆なので丁度真夏で暑い。何はともあれ、貝殻屋根で有名な世界遺産のオペラハウスへ。海に向かって真っ白な貝殻状の屋根が連なる様は、何処から見ても絵になる風景で、室内も幾つものホールが機能的に配置されていて、さすがに世界遺産である。

市内主要部には、高架のモノレールがあり、移動には便利である。なお、交通ルールは日本と同じく右側通行なので、違和感がない。市内のあちこちの道路面に、シドニーオリンピック（2000年）女子マラソンで優勝した高橋尚子選手の名前と通過距離が白線で残されており、このような記録の残し方もあるのだと、感心した。途中、シドニータワー（328m）から、市内眺望を満喫。夕方近隣の公園の木が騒がしいので、よく見るとカラスほどもある大蝙蝠が飛び回ってびっくりする。

翌日は、西部郊外の世界遺産ブルーマウンテン国立公園観光へ。広大なユーカリ林から放出される油滴が、日光を受けて青くかすんで見えることから名付けられたという。石灰岩がえぐられてできたジャクソン溪谷



シドニー・オペラハウス

に面した展望台は、足がすくむが、谷に面してそそり立つ岩峰スリースターズを眺めた後、世界一急傾斜の鉄道と称されるシーニックレイルウェイで谷底まで急降下、密林の中をブッシュウォーク。展望台に戻り、谷を一跨ぎするシーニックゴンドラに乗車、素通しの床から谷を見下ろして、又も足がすくむ。夕方からシドニー湾クルーズへ。湾口をまたぐハーバー・ブリッジとオペラハウスを眺めながら、一周。湾口は、グレートバリヤリーフに連なる太平洋で、サーファーのメッカだという。

3. 世界遺産 ウルル（エアーズロック）

翌朝世界2番目の大岩ウルルへ。（これまでの呼称エアーズロックからアボリジニの聖地名に改称、ちなみに世界一の大岩は西オーストラリア州のマウントオーガスタス）標準時が3地帯に分かれるこの国の中間地帯の中央部に近い位置にあり、ステップ特有の乾燥に強い草がまばらに生える地で、見通しが良く平原状なので、わが国の宇宙探査機はやぶさの着陸地もこの周辺である。

まずは、空港からバスで移動して、世界遺産のオルテガ山と渓谷を散策、ウルルと同時期に生成されたという砂岩が連なるせっかくの絶景も、とにかく暑いのと羽虫が密集していて、窒息しそう。前に分かっていたら養蜂家が使っている網付き帽子を用意したのだが、後の祭り。幸い刺す虫ではないので助かるが、タオルで防いでも口や鼻に入り込み鬱陶しくて往生する。

いよいよウルルに移動。不毛の乾燥地帯に聳える夕日で朱に染まった一枚岩の圧倒的な存在感は、大自然の妙を感じると共にアボリジニの聖地とされていることに納得する。

翌早朝ウルルの東側サンライズポイントから日の出に染まるウルルを一望後、麓の聖地を半周（全周9.4 km）。いよいよ西側ルートから登山開始、見た目ほど

急峻ではなく鎖に掴まることもなく、赤茶けた砂岩を1時間ほど登って山頂到達。標高868 m（比高335 m）。お椀を伏せたような一枚岩のため山頂も、ほぼ平らであるが見晴らしは抜群である、吹き抜ける風が心地よい。登山可能の確率は30%（天候、宗教行事）程度とこのことで幸運を感謝しながら360度風景を堪能して、ウルルに別れを告げ空港へ。なお、2019年秋から、ウルルは宗教上の理由で入山禁止となった、山頂のあの360度の解放感を味わえなくなったのは、やむを得ないこととはいえ残念！

4. パース

午後から空路で西海岸最大の都市パース（200万人）へ。インド洋に面し南緯32度、地中海性気候の温暖で暮らしやすい街と言われ、リタイヤした人々の憧れの地であるという。

空港に降り立ってまず驚いたのが検疫。国内移動にもかかわらず、麻薬犬ならぬ検疫犬がいて、外国からの入国並みの体制。東西で生鮮動植物の交雑、疫病感染を避ける為の処置、さすがは大陸国ならではの。空港を出たのち市内観光、大都市にもかかわらず海も空も空気も綺麗。動物園では、カンガルー、コアラ、ウォンバットと間近に交流？童心に還る。

翌日は市の北方200 kmのナンブング国立公園で、砂漠の墓標と言われるピナクルズの岩塔群を見物、奇観である。3日目は、インド洋に浮ぶロットネスト島（沖合30 km）にフェリーで出かけ、つかの間の海水浴を楽しむ、海水が透きとおっていて綺麗。島内には固有種の有袋類クオッカ（小型の兎位の大きさ）がいて、道端を自由に歩いていて人懐っこくて、笑顔に見える顔が人気で可愛い（接触、餌やりは禁止）。

帰港後、慌しくお土産を求めたのちパース空港へ。直行9時間半で成田着。遠いようで近いオーストラリア大陸東西4,000 km横断8日間の旅を終わる。



ウルル（エアーズロック）の朝焼け



クオッカ（有袋類ワラビーの1種）